The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	南琉球八重山黒島方言の文法
Author(s)	原田, 走一郎
Citation	大阪大学, 2016, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/55692
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　原田走一郎　）	
論文題名	南琉球八重山黒島方言の文法

論文内容の要旨

本論文では南琉球八重山黒島方言（以下、黒島方言とする）の文法を記述した。本論文は二部に分けられる。第一部においては、黒島方言の全般的な記述を行った。第二部では、5つのトピックを取り上げそれらについて論じた。

第一部は、10の章から成る。1章では、話者数や系統など、黒島方言のおかれた現状について述べた。2章では音韻について述べた。3章では文法の概要を述べた。4章では、名詞の形態と名詞句について述べた。5章、6章はそれぞれ、動詞、形容詞の形態について述べた章である。7章では他の品詞について述べた。8章では助詞について述べた。9章では述部について述べた。10章では統語的特徴と意味について述べた。

第二部では、5つのトピックを取り上げた。11章では二重有声摩擦音について、12章では形容詞の認定について、13章ではいわゆる終止形と連体形について、14章においてはテンポラリティー、アスペクチュアリティー、エビデンシャリティーがからむ接尾辞について、15章においては属性語幹形成接辞についてそれぞれ述べた。これらの章においては、他の方言との対照や、言語類型に対する言及などが含まれるため、記述文法から取り出して個別に扱った。

以下、本要旨では、黒島方言の概要について述べる。そのため、第二部で取り上げたこれらのトピックも個別に扱わず、各項目のなかで触れることとする。

黒島方言は沖縄県八重山郡竹富町黒島において使用されている言語である。話者はほぼ75歳以上であり、多く見積もっても40名ほどの数しかない。系統としては、南琉球諸語、八重山語に属する。ただし、近隣の方言との相互理解はないようである。黒島内部の方言差は大きくないものの、音声的特徴、動詞の形態など、確かに存在する。黒島方言の先行研究は全部で10本前後と極めて少ない。さらに、これまでの研究は他の琉球諸語や本土の日本語との対応関係を明らかにすることを目標とするものが多かった。したがって、黒島方言をひとつの言語としてとらえ、その体系を記述しようという試みは本研究が初めてである。

黒島方言には、15の子音（p, b, m, f, v, t, d, c, s, z, n, r, k, g, h）、2つの半母音（j, w）、 5つの短母音（i, e, a, o, u）とそれらに対応する長母音を音素として認める。母音、子音ともに長短の対立を持つ。音節構造は、(C)(C)(S)V(V)(C)である。ただし、語頭のCCは（h, b, d, gを除く）同じ子音の連続、もしくは、鼻音と阻害音の連続のいずれかである。また、語末のCはnかrだけである。したがって、これらと、長母音、半母音等を除けばCVを基本とする音節構造である。黒島方言は多様な形態音韻規則が特徴的である。代表的なものとしては、aを先頭に持つ拘束形態素と、haを先頭に持つ拘束形態素の双方向母音同化があげられる。これらは同じメカニズムで説明でき、haを先頭に持つ拘束形態素の同化は子音hを挟んだ母音同化である。また、別の音韻的特徴としては、二重有声摩擦音が単音の有声摩擦音と音韻的対立がある。二重有声摩擦音は、語中で無声化するなど、特徴的なふるまいを示す。この変異のあり方は、言語類型論的傾向（「二重摩擦音は語頭より語中に現れやすい」「二重摩擦音は有声より無声が現れやすい」）に合致するものである。

黒島方言の節は述部とそれにかかわる名詞句で構成される。述部とともに節を構成する名詞句は、原則的には、述部より左側にあらわれる。基本的な構成素順は他動詞の場合AOVで、自動詞の場合SVであるが、義務的ではない。むしろ、述部と名詞句との関係は名詞句に後接する助詞によって示される。原則的には、他動詞主語と自動詞主語は格助詞=nuで、他動詞目的語は格助詞=juもしくは=baでマークされる主格対格型言語である。ただし、稀に自然現象などの他動性の低いSを=juもしくは=baでマークする場合があるが、これも義務的ではない。なお、形容詞文、名詞文の主語を=juや=baでマークすることはない。述部の種類には、動詞述部、形容詞述部、名詞述部の3つがある。形容詞文、名詞文は主題題述構造をとるのがふつうである。

名詞句は、任意の修飾部と名詞から成る。最小の名詞句は、ひとつの名詞のみで構成される。ただ、形式名詞を主要部とする名詞句に関しては、修飾部が必須である。修飾部を埋めうるのは、節（動詞節、形容詞節）、属格助詞を

伴う名詞、連体詞である。修飾部は主要部に先行する。

形態的な主な単位として、語、助詞、接辞を認める。語は、少なくともひとつの語根を含んだ自由形式である。複合語の場合は語根を2つ以上持つ。語は内部に節や句を含まない。助詞は自由形式にのみ付く。ただ、助詞自体は拘束形式である。接辞と比べた場合に、助詞の大きな特徴は、付く形式の自由度が高い点である。つまり、例えば、典型的な助詞である終助詞は名詞にも後接するし、動詞にも後接する。接辞は、拘束形式に付くものが多い。ただし、著しくその接続する形式が限定されている場合は（自由形式である）名詞に付く形式であっても接辞と認める場合がある。形態法としては、接辞添加、複合、重複の3つがある。

黒島方言には、動詞、名詞、形容詞、連体詞、感動詞、接続詞、副詞、助詞の8つの品詞を認める。ただし、上にも述べたとおり、助詞は厳密には語とは異なる性質を持つ。このうち、動詞と形容詞が活用する。この点において形容詞と動詞は似ているが、形容詞は接尾辞をとらず、多様な統語環境に現れる絶対形を持つという点において動詞と異なるため、本研究では黒島方言に形容詞という品詞を立てる。

名詞は唯一接頭辞を持つ。また、接尾辞も持つ。代名詞は普通名詞とは異なる形態的性質を持つ。動詞を前部要素に名詞を後部要素に持つ、複合名詞を利用した感嘆文もある。名詞文は主題題述構造をとり、2つの名詞句があるのが普通であるが、この感嘆文は修飾部を伴う大きな名詞句が単独で存在する、という点において特徴的である。

動詞は、語根と接尾辞から成る。動詞語根は活用の型によって分類がなされる。語幹が交替する不規則活用と、語幹の交替のない規則活用である。不規則動詞はsi「する」とfur「来る」である。規則動詞はA型動詞とB型動詞に分類される。これらは、命令形と禁止形を作って比べることで違いがわかる。語幹末音などではわからない。A型動詞はさらに、基本A型、r末尾型、s末尾型に下位分類される。存在動詞類はr末尾型に含まれるが、一部異なる点も持つ。コピュラについても存在動詞と同じく、r末尾型の1種である。動詞接辞は義務性によって、義務接尾辞と任意接尾辞に分類される。義務接尾辞は、命令などの対人的モダリティを担うもの、時制を担うものと、その他のものに分けられる。任意接尾辞は義務接尾辞の前に立つものと、あとに立つものに分けられる。語根と義務接尾辞の間に立つものはヴォイスやアスペクトなどの意味的拡張を担う。義務接尾辞に続く任意接尾辞は統語位置を示す。従来「連体形」や「終止形」とされてきた動詞形態はこれらのうちの義務接尾辞であり、実際には統語情報は持たない。また、いわゆる動詞連用形（本稿では不定形と呼ぶ）で文を終える用法もあったり、意味的には時間的表現を含むものの連体修飾節末には生起しえない接尾辞があったりするなど、黒島方言の切れ・続きは本土日本語とは異なる。また、動詞述部は、通常の動詞述部のほかに、助動詞述部、軽動詞述部がある。

黒島方言の形容詞は他の方言の形容詞に比べて特徴的である。まず、形容詞が2種類ある。1つを普通形容詞、もう1つを比較形容詞と称する。これはつまり、1つの語根から2つの形容詞が派生される、ということである。つまり、guffa「重い」という語根であれば、このままのかたちで普通形容詞guffa、そして、guffakuという比較形容詞を形成する。もう1点、黒島方言の形容詞が特徴的なのは、語根類が2つある、ということである。この類は、先ほどのguffaとは異なり、たとえばguma「小さい」という語根であれば、普通形容詞はgumaha、比較形容詞はgumakuとなり、ふるまいが異なる。この語根のサブグループは、この普通形容詞、比較形容詞の派生の際だけではなく、重複や複合の際にも有効であり、黒島方言の記述には不可欠である。

品詞を転換する形態操作は黒島方言では、動詞語根を形容詞化するものしか発見されていない。そのうち、idaという接尾辞は意味的には属性をあらわし、多義的であるが、単純な属性ではなく、段階性のある属性をあらわすものである。

黒島方言の助詞は、格助詞、属格助詞、とりたて助詞、接続助詞、終助詞に分類される。格助詞は名詞と述部の関係を、属格助詞は名詞と名詞の関係をあらわす。とりたて助詞は様々な要素につき、それらの情報上の特徴をあらわす。接続助詞は節に後接し、続く節との関係を示す。終助詞は文末に生起し、主に聞き手への働きかけなどをあらわす。これらのうち、とりたて助詞だけが統語情報を持っておらず、多様な要素に後接する。

節は、主節と従属節に分けられる。従属節はさらに、連体修飾節、副詞節、引用節に分けられる。連体修飾節末に生起しうる動詞は時制接尾辞で終えるかたちと、連体接尾辞をとるかたちである。副詞節末には、動詞の形態でその統語位置を示すものと、時制接尾辞を動詞末にとり、それにさらに助詞を付して統語位置を示すものの2種類に分けられる。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　原田　走一郎　）			
論文審査担当者	（職）		氏　名
	主 査	大阪大学　教授	渋谷　勝己
	副 査	大阪大学　教授	田野村　忠温
	副 査	大阪大学　准教授	高木　千恵

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式７別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：　南琉球八重山黒島方言の文法

学位申請者　原田　走一郎

論文審査担当者

主査　大阪大学教授　　渋谷　勝己

副査　大阪大学教授　　田野村　忠温

副査　大阪大学准教授　高木　千恵

【論文内容の要旨】

本論文は、消滅の危機に瀕している南琉球八重山黒島方言を対象としてその文法の概略を記述するとともに、類型論的に興味の持たれる当該方言の言語事象を個別に取り出してその特徴を詳細に明らかにしたものである。「第一部 記述文法」、「第二部 個別トピック」の２部より構成され、本文 266 頁、400 字詰原稿用紙に換算して約 750 枚の分量である。

「第一部 記述文法」は 10 章からなる。第１章では、黒島および黒島が置かれている社会状況、先行研究、本論文で使用する資料等について述べている。第２章は黒島方言の音素とその異音、音節構造、モーラ構造、プロソディ、形態音韻規則を整理したところで、次章以下の基礎となる記述が行われている。第３章では、基本的な節の構造、名詞句、述部、語・助詞・接辞、品詞、形態法などの概要がごく大まかにまとめられ、以下の章の見取り図が示されている。第４章から第 10 章ではそれをうけて、それぞれ、名詞と名詞句（第４章）、動詞（第５章）、形容詞（第６章）、その他の品詞（第７章）、助詞（第８章）、述部（第９章）、統語・意味（第 10 章）が記述されている。たとえば動詞を扱った第５章では、動詞を、その活用によってＡ型動詞、Ｂ型動詞、不規則動詞にわけ、それぞれを下位区分してさらに細かく整理するとともに、動詞に後接する接尾辞を義務接尾辞と任意接尾辞にわけ、それぞれに属する接尾辞を体系的にまとめている。また、琉球語研究界で議論の多い形容詞を取り上げた第６章では、黒島方言には活用面などから形容詞を認めることが必要であると認定したうえで、形容詞語根に２つのサブグループを設定し、それぞれの特徴やふるまいの異同などをつぶさに記述している。第８章や第 10 章は関係する形式や事象を網羅したところで、前者では黒島方言の格助詞、属格助詞、とりたて助詞、接続助詞、終助詞を、後者では単文、複文、文タイプ、情報構造、テンポラリティー、アスペクチュアリティー、可能、否定などを可能なかぎり包括的に提示している。

「第二部 個別トピック」は５章よりなる。第 11 章では黒島方言の zzan（しらみ）や vvuiru（黒色）などの語に見られる二重有声摩擦音を取り上げて、二重音と単音の有声摩擦音が音韻的に対立することを論証するとともに、二重子音の類型論においては、位置、有声性、調音法などを個々に考えるのではなく、組み合わせて考えることの重要性を指摘している。続く第 12 章では、第６章で記述された形容詞をあらためて取り上げて、先行研究が採用した認定基準やそこで提示されている琉球語諸方言の実態を詳細に検討するとともに、黒島方言の形容詞

が示す形態的、統語的ふるまいと、動詞や存在動詞、名詞＋コピュラ等が示すそれを比較することによって、黒島方言では形容詞を認定することが必要であることを再度確認している。第 13 章は、黒島方言の動詞の「終止形」と「連体形」について、先行研究が得た結果と本論文の結果を対比したもので、当該方言には過去の連体修飾節末専用の形式が存在すること、従来の研究で「連体形」と呼ばれていたかたちには統語情報が示されていないこと、主節末と連体修飾節末にたちうるかたちには典型的な屈折接辞がないことなどを述べている。第 14 章では、黒島方言に特徴的なテンポラリティー・アスペクチュアリティー・エビデンシャリティーを複合的に担う接尾辞 jassu の形態統語的特徴と意味特徴を詳細に記述し、形態統語面では義務接尾辞であること、時制接尾辞と共起しないこと、主節末と副詞節末には生起するが連体修飾節末には生起しないこと、意味面では直前に話者が直接経験した状況の変化を表すこと、などを明らかにしている。第 15 章では、これも黒島方言に特徴的に見出される属性語幹化接尾辞-ida-を取り上げ、形態的には動詞語幹に付され、あとに形容詞化接辞をとること、統語的には属性語幹化して主題題述構造をとるものの、もとの動詞の結合価を変えることはないこと、意味的には、主題が、話者が考える基準を超えてある動作を行うといった意味を加えるものであること、などを解明している。

最後の第 16 章で、今後に残された課題をまとめている。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、消滅の危機に瀕した南琉球八重山黒島方言を対象に、現地のフィールドワークで収集した談話データやインフォーマントに対して行った面接調査で得られた情報を縦横に駆使して、その文法の全般的なスケッチと、個別の言語事象の詳細な記述を行ったものである。当該方言については本論文以前に行われた記述、研究の蓄積がほとんどなく、音素目録や形態音韻規則等を整理するといった基礎的な作業から着手しなければならない状況であったが、現地に長期にわたって滞在し、現地の人々とのネットワークを構築しつつ調査を進め、分析を加えて一定の内容をもつ文法記述としてまとめ上げ、学界や社会に広く提供できるレベルに達した点に大きな意義がある。今後、当該方言についてまず参照されるべき、現時点でもっとも完成度の高い記述に仕上がっている。そのほか、第二部に収録された、琉球語諸方言において形容詞を認定することの必要性の有無、二重有声摩擦音の類型論的な把握のしかたなどをめぐる議論や、接尾辞 jassu、-ida-などの記述にも見るべきところが多い。

ただし、問題点がないわけではない。たとえば、第一部の記述については、音素の分析・記述に改善の余地がある、終助詞等にはまだ最小の単位を取り出せていないように見えるところがある、第 4 章以下で記述された各言語事象についてもアクセントをはじめとして十分でないところが多々残されている、とくに第 10 章の統語・意味についての記述はまだ浅いものにとどまっている、などの問題がある。音節構造の示し方や記述に用いた用語にも不適切なところがある。また、第二部で取り上げた個々の事象についても、琉球諸語の他の方言と比較、対照することによって記述等に修正を迫られる可能性のあるところがあり、類型論的な主張を行うのであればより多くの言語を視野に入れる必要がある。

このようにいくつかの問題点は残されているが、これらはむしろ、今後の発展のための課題として捉えられるべき性質のものであって、黒島方言についての一定のレベルの文法記述を学界や社会に提供し、あわせて当該方言の個別の言語事象を深く分析した本論文の本質的な価値を損なうものではない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。